
海からの襲撃者

どさんこ侍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海からの襲撃者

【Nコード】

N6039Q

【作者名】

どさんこ侍

【あらすじ】

西暦2032年。突如飛来した隕石で世界が揺れるお話。

ブログ：流星（前書き）

えーと、初めて投稿するどさんこ侍です。

よろしくおねがいます。

プロローグ…流星

西暦2032年。7月某日。午前2時半。

突如として地球引力圏内にワープアウトしてきた大質量隕石は、そのまま地球へと落下してきた。

しかし落下際、大気圏の摩擦で空中分解を、起こし中でも巨大だった三つの隕石、

南極大陸に落ちた通称アップル。

太平洋に落ちたオレンジ。

そして、日本の領海内に落ちた、グレープ。

それらは、世界に多大な被害を与えながら、海底に没した。

本

それから、2年後日

領海内、八戸沖に到着した隕石…グレープの影響で、太平洋側沿岸の地域は壊滅的な状況に陥った。

これにより首都を、群馬に変更、そして壊滅した県を他の県に統合する、「都道府県統制」という政策を、新たに発足した「新日本政府」は、打ち出した。

中でも、国内で被害が甚大だった青森県を日本海側から青森市までを津軽県とし、八甲田山を境界線として下北をいれた太平洋側の地域までを南部県とした。

そして、太平洋側の地域の復興のために日本は、独自に人型作業機器MF…マシン・フレームを開発、使用を始めた。

プロローグ：流星（後書き）

読んで下さってありがとうございました。

誤字脱字があったらおしえてください。

第零話？ 十年前（前書き）

皆さん、お久しぶりです。

どさんこ侍です。

さて、今回は第零話、実質二話目という事で、気合を入れて書いた
ら自分としては

とても長くなってしまいました。

それでも、気軽に、気長に読んでくれたら嬉しいです。

つーわけで、本編スタート！！！！

第零話？ 十年前

「ごめん、待っちゃった？」

彼女の問いに津軽第八高等学校三年 倉崎一輝くらさき いっけいは、いいや、と答える。

「そう、？」

だったらよかった。じゃあ行こっか。」

それでさあ、真子がなんか知らないけど、そこにあったバナナの皮を踏んでこけたんだよね。・・・ってきいてる？」

「ああ 聴いてる聴いてる。バナナで真子がこけた・・・んだ・・・ろ？」

彼女Ⅱ坂峰結亜さかみね ゆあに突然、聞かれて少年は、あわてて答える。 同じく一年の

だが、その結亜の上目づかいの表情が魅惑的で、思わず語尾がとぎれとぎれになってしまった。

そんな他愛のない事を話ながら通学路を歩くこと十数分、津軽ニューブリッチのほぼ中央たどり着いた 二人はふと、足を止めて海の方を向いた。

「綺麗だね」

五時半。

時刻は午後

今、まさに沈みかけている夕日を見てまず口を開いたのは、結亜だった。

「ああ」

橋下には、落下の途中に剥がれ落ちたグレープの破片が墜落した旧青森湾、今の津軽湾の復興作業を

している、MFを使用する特殊自衛隊と、湾岸警備隊の人たちとMFがあっただが、夕日が沈みゆく

光景は、それでも一輝の目には美しく映った。

その夕日を見て、一輝は、決心した。

もうちよい、くそっ、あともうちよい

自分の手と、結亜の手の距離は、十センチも無いだろう。

その手を握ろうとすればすぐにでも握られる距離だが、いざやってみるとなると、思うように行かない。

手が鉛のように重たい。

ああ、もう、クソッ、こんなこと一気にやれば済むことだろうが、行くぞ俺、行くぞ倉崎一輝。

これが、彼にとってのファイナル・アンサーだった。

自らの重たい手を、結亜に見つからないように軽く一回叩き、気合を注入する。

そして、一気に彼女の、色白の華奢な手を握り締めた。

「ごめん、びっくりさせたかな」

一瞬体がびくつとするのが分かる。

しかし、すぐに結亜は、こちらを向いた。

「ど、どう、した、の？いきなり・・・」

「う・うん、あの、さあ」

ここまでは言えたが、次に言おうとしている言葉が、なかなか言い出せない。

顔が熱い。

たぶん、赤くなってきたいるのだろう。

こういう時、夕日の光が、顔をカモフラージュして丁度良い。

「あ、あのさあ、いつも二人で帰ったりしてるけどさ、一つ言っていない事があるんだ。」

ゆっくりうなづく結亜。

いつからいたのだろうか、航空自衛隊の哨戒機はその独特なエンジン音を辺りに響かせながら二人のいる、津軽ベイブリッジの上空を旋回している。

だが一輝は、そんな事にかまわず、正確にはかまう余裕が無かったのだが言葉をつづけた。

「俺、結亜の事 好きだ。」

これまでに、体験した事が無い程に大きい緊張を味わう一瞬。
そして、結亜は、何かを言おうと口を開いた。
鼓膜が破れんばかりの大音量と降って来る瓦礫その他諸々が二人を襲ったのは、まさにその時だった。

ズキズキと体の節々が痛い。そして、結亜がいない。
その、二つに気づいたとき、一輝の意識は完全に戻っていた。
辺りを、くまなく見渡す。

結亜は、いない。
所々光が漏れているがやけに薄暗い。特に上から光が入って来ないのは、そこに何かが覆いかぶさっているからなのだろうか。

ともかく、ここから抜け出さない限りどうにもならない。
一輝は、この狭い空間の中で何とかして、片ひざ立ちをする。
そして両手を、覆いかぶさっている何かに当てると上に押し上げた。

「おりゃああああああああああああああああああ」
バボン、という気の抜けた音がして、あっさりとかぶさっていたアルミらしき鉄板が取れた。

急激に周りの明るさが変化したため目が馴れず、思わず目を細めてしまう。

そして、外の明るさに馴れて周りを見たとき一輝は、愕然とした。
なぜなら、彼のすぐ手前。今まで結亜がいた場所に、橋が無かったからだ。

「う、嘘だろ!？」
もっと前方を見ると橋は、向こう岸の方まで崩れている。

時折強く吹く風が、髪を乱す。

その時、今自分のいる場所の、すぐ真下の海面に、きらりと輝く何かがあった。

目を凝らしてよく見る。

それは――

「結亜ああああああああっっっ！！！！！！！！」
思わず叫んでいた。

なぜなら、その輝く物は、結亜のペンダントだったのだから。

だが、当の持ち主の姿は見あたらない。

もう、橋の崩落に巻き込まれて死んでしまったのか。

ふとそんな考え頭をよぎる。

「そんな事あるもんかよ。結亜は絶対まだ生きているんだ。」

まるで自分に言い聞かせるように、一輝は呟いた。

ペンダントがまだ海に浮いている事確かめて、今いる崩れた橋の淵から数歩下がる。

今、助けるからな。待ってろよ、結亜

呼吸を整え、制服の袖をまくる。

そして、夕時の蒼く暗い不思議な色合いを放つ津軽湾の海を見据え一輝は、その中へ飛び込んだ。

くっそ、何にも見えねえ。

これが、海中に飛び込んでみた素直な感想だった。

崩落した、ニューブリッチの破片が海底の、泥や砂を巻き上げ猛烈に視界が悪く、

なんとか、夕日の光が照らしていて半径1メートル位の視界が有るが、それもいつまで持つか分からない

手に有るペンダントの硬い感触確かめながら、必死に泳ぎ回って結亜を捜すがそれらしき姿には、見つからない。

一度海面に出る。

知らないうちに、橋の中央の橋げたまで来ていたようだ。

たしか、崩れ始めたのって、この辺りからじゃなかったけ？

ふと、そんな疑問が頭の隅に生まれたが、結亜を助ける事に集中しようとして、それを追い出す。

「さあ。今度はこの辺だ」

わざと声を張り上げて気合を入れる。

そして、また海へと潜った。

視界は、前と殆ど変わっていなく、むしろ悪くなっている
と一輝は思った。

一応、橋げたから離れるつもりで泳いでいるのだが、なにぶん滅茶苦茶に泳いでいるのでここが、
どこなのかよく分からない。

水中で体を、一回転させて見る。

と、その時自分のいるところより、少し潜ったところに今まで見た
ことが無い黒い影があった。

まさか、結亜！

意外な程に冷たかった海水や、これまでに泳いだための疲労が、
一気に一輝の体力を奪っていく。

それでも、そんな体を無理やりに、動かしてその黒い影の元へと向
かった。

「結亜あああつつつ！！！」

影は、結亜だった。

息は、まだ有る。

だが、しかし、その彼女の細く華奢な胴を、千切れてひしゃげた太い鉄骨が深く、貫いていた。

しかも、それが重石となつて、どんどん沈んでいく。

一輝は、少女を抱えて、沈むのを食い止める。

「おい、しっかりしろ結亜、おい。」

返事はない。

くそ、せめて鉄骨だけでも。

そう思い、例の鉄骨に手を掛けゆつくりと、手前に引っ張る。

その時、腹の傷口から大量の血があふれ出た。

「・・・・・・・・・・う・・・・・・・・・・うう」

苦しうに身をよじる結亜。

「うわっ、ヤバイ」

一輝は、血の出た箇所を手でおさえ海面へ、出ようとした。

ぱっと光の線が、上昇する二人のすぐ脇を迸ったのはそのときだった。

熱を持っていた光は、海水と反応して水蒸気爆発を起こす。

それに巻き込まれる直前、一輝は光が発射された方角を見る。

そこには、背中に巨大な棘を生やした、蟹ともザリガニともつかない、頭部に大きな眼球が一つだけある

赤い、甲殻類型の生物がいた。

一輝は、その生物が津軽ニューブリッチを破壊したのだと、直感した。

第零話？ 十年前（後書き）

これで、第二話終了です。

どうでした？

もしよかったら、コメント下さい。

次回予告

今度は、三年前の事を書こうと思っています。

何？プロローグが長いって？

すみません、もう少しだけ我慢してください。

それではみんな、あでいおす

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6039q/>

海からの襲撃者

2011年10月8日15時46分発行